

は貞心尼へ送つた「裏を見せおもてを見せて散るもみぢ」と云ふ俳句と、
の「弟子たちへかたみの歌」と前書ある「かたみとて何かのこさむ春は花夏ほ
とゞぎす秋はもみぢば」と云ふ短歌との二首なのであらう。

■歌の添削

良寛も時々人から歌の添削を頼まれたことがあるらしく、他人の歌につい
ての意見を述べた手紙や、又は他人の詠草に加筆したものが、少しは見受
けられる。それらのうちには良寛の作歌上の用意を窺ふ上の資料となるも
のが少なくない。その一二例を挙げると次の如くである。

一、眺島齋秦樹の詠草に加筆したもの、(右傍の小文字は良寛の加筆
である。)

○月を

杉が枝に昔の月は宿れども

あひ見し
見なれし人はかげも止めず

○冬の頃

うつつし身の人のこゝろの
あさからぬこゝろのそこのうれしさは

深き嘆きのたねとこそなれ

冬のねざめのものうきに
さらぬだにねざめものうき冬の夜の

乾きもあへぬ片しきの袖

○百箇日の悲

明くと暮ると
わけくる、憂き世の中を嘆きつゝ、

急ぐともなくて立つ日數かな

○初冬の頃

我妹子が植ゑてさへ見し

朝夕にをしみしものを菊の花

けふは折りて手向となすがはかなさ

見る毎にいと嘆きの増鏡

あひみしなれにし人のかげもとめば

過し月のけふの此の日は来れども

過ぎにしはかなき人は音づれもせぬ

○

思ひきや氷る霜夜も片しきの

袖の涙に朽ちん物とは

百とせと何にちかひけむ秋の野の

秋風に

小萩がうへの
ちぎりはかなき露の世の中

○月を見て

見し人は其の面かげも無きものを

照す秋の夜の月
隈なくすめる秋の月かな

○はてに書ける巻に

今更はいつくしむべき影もなし

ましせめて書かなむ法のみ文を

二、原田正貞への書翰

○

夏衣たちてきぬれどみやまべは

いまだ春かも(とや)うくひすの鳴く

ひとりぬるたびねのゆかのあかとき

かへれとやなく山ほとゝぎす

(まくらべは蟲ならば)

正貞老

良寛

○

いそぎ候間おちしことも可有之

酒たはこ恭納受仕候

あるかひもなぎさによする白浪の

かへらぬ年をなに喚くらむ

(まなくひまなくなり
ついきはいかに)

おしめともとしはかぎりとなりけり

わがおもふことのいつかはてなむ

あさなくめがれぬつばきてもさへに

をりてそおくるいたづらにすな

(あまりつまりたるやうなればうゑし椿
なけふこそはたてまつるとすはいかに)

正貞老

良寛

■良寛の贈答歌

良寛の數多い歌のうちで、特に注目すべきは他人への贈答歌である。無論良寛がひとり静かによんだ歌にも佳い歌が多くあるが、しかも彼の贈答歌に至つてはその殆んど凡てが秀歌であると云つてよい。人に向つて自己の情想を流露し得た點に於て、私は古來良寛の歌ほど自由な、天真な、充實したものは極めて少なからうとおもふ。まつたく良寛の贈答歌はたゞひ稀な

天品である。良寛の歌を誦する人は此の點に注意して貰ひたいものである。

五八二

■幼時の讀書癖

幼少年時代の良寛が如何に深く讀書を好んだかを證する資料の一端にもとて、藤井界雄師から左の如き逸話一篇を示された。

「禪師幼時、讀書冥想に耽けるを唯一の楽しみとして他出を好まざりき。

母は其勤勉なることを心中甚だ喜びつゝも亦鬱幽症に罹らざらん事をひそかに憂ふ。

或時、それは盆の夕ぐれにてありき。折柄屋前を廻り過ぐる盆踊の一组あるを見、禪師に踊を見、且少時の散策をとらんことを勸む。蓋し禪師の身體の爲めを思へばなり。されど禪師喜色なく黙々として漸くに去る。

暫くして日は全く没し、母所用ありて庭に下り裏木戸に至らんとするや、傍の石燈籠の蔭に怪しき人影の佇むを認め、大に驚き且訝り宛矣夜盜の忍び入りたるものと思惟し、倉皇携へ出でたる薙刀を振上げ一下せんとすれば、そのたゞならぬ氣配に驚きたるかの人影は、「母よ吾なりゆるし玉へ」と云ふ。その聲に初めて吾子と知りたる母は、近寄りてよく見れば、正しく彼にして、しかも論語一卷を開きたるまゝ手にしてありきと。右は新潟の神職日野徳三郎氏が良寛禪師の實妹より聽き得たる直話なりと云ふ。

■越後歸りの鵬齋を諷した川柳

その昔の川柳に「鵬齋は越後歸りで字がくねり」と云ふのがあると云ふこ

五八三

とである。越後へ来て良寛の感化を受けた後の鵬齋の書の上の變化が、如何に著しいものであつたか、これによつても窺ふことが出来る。

■五合庵の創設者

良寛が彼の最も徹底した生活を營んでゐた國上山の五合庵が、貞享年間國上寺の隱居萬元阿闍梨の爲めに始めて建てられたものであることは前にも述べたが、此の萬元阿闍梨の如何なる人物であつたかについては、彼自身の『題五合庵壁并引』と題する文章が最も明らかに語つてゐる。

「沙彌萬元者釋子之孤子也、生涯多病而懶學業、從來薄情而耽游戲、夫和之初遭身之不幸、而自踏京城之花蹟、隱北越之雪、于時久賀躬寺貫主良長僧都幸知己之老僧也、故見吾輩々子々、而哀憐益深、親分飯省衣、慰

養茲有年矣、貞享之末、脩廬於寺院之傍、使吾居之、毎日寄粗米五合、扶頭陀之勞、仍以爲號、寢食彌安、起居最樂矣、於是忽忘昨日不意姿、云々」
 なほ此の萬元阿闍梨竝に五合庵のことについて、かの『北越奇談』の著者は次の如く記してゐる。

「萬元和尚、是は越國の産にあらずといへども雲上山國上寺中興にして即此山に寂す、實は皇都の産にしてやんごとなき御種にわたらせ給ふよし、即ち自述に「於伊の寢覺」といへる書あり、其の始めにあらましを記し給へり、甚麗雅なる文體にして奇說甚だおほしといへども、入寂の後誰ありて梓に上すものもあらず、誰渠がもとに其艸稿の寫しのみ残り、予が家にも即元和尚自筆の艸稿一冊を祕藏せり、追て書林にあらはさんと欲す、扱元和尚博學大德詩を賦し和歌を詠じ、且滑稽を好んで狂歌俳諧

をよくす、生涯の奇事甚多し、即國上山阿彌陀堂を建立し、山中清寥の地をえらんで隱居せり、名付て五合庵と稱す。松竹縁をまじへ石徑苔厚く遙かに人跡を隔て誠に遠公支遁が興可_レ知。」

之れによつて見ると、此の萬元和尚の生涯もかなり味ひの深いものであつたらしい。

夕ぐれの岡の松木の人ならば

むかしの事をとほましものを

と良寛が思慕をその人の上に寄せたのも決して偶然ではなかつた。

萬元和尚の歌は西郡氏の『良寛全傳』にも十數首載せてあるが、私はこゝに私の郷里の故人牧江靖齋の遺品中から見出した寫本『沙門良寛師歌集』二卷の附録として添へられた『國上萬元師歌集』中から拔萃して置く事にする。

思ひ出で、啼く音もたえず百千鳥

そのきさらぎのけふの別れを

君は我われは君ゆゑ身をすてし

思ひかへすな思ひかへさじ

君はわれわれは君にとすつる世を

おもひかへさじおもひかへすな

九重の都はさそな八重山や

越の雪路も今朝はのどけき

けふもまたきのふの空の雲はあれど

よそにぞはらふ袖の春風

夏草をむすぶためしの旅ごろも

立ちわかるとも道なわすれそ

秋の夜は玉のうてなも淋しきに

まして賤屋にひとりねの袖

よしあしもなにはもゆめの浮世ぞと

おもふねざめの曉もがな

つくば山よゝの言の葉しげりきて

わけのぼるべき道もしられず

ながめやるそらにつれなき雨雲は

いやひこ山のこなたにぞ立つ

越路なるいやひこ山のいやましに

あひ見しかたもおもひつるかな

身のつみも心のちりももろともに

よそにわけゆくあかつきの空

よしや世はあしのかりねのかりにだに

知らるな人にふかき心を

沖つ波雪氣の風にたちまよひ

なほ白妙のこしのうなばら

あき風に山の木の葉はさもあらばあれ

人のこゝろの松はつれなき

■宗龍禪師と良寛

貞心尼文書中にある宗龍禪師と良寛との關係についての消息は、良寛その

人の或る時期の風姿を偲ばせるに絶好の資料である。その宗龍禪師と云ふのはおそらく京都大徳寺の宗龍靈巖和尚の事であらう。求道の一念に燃えて居た頃の良寛の面目は、實に左の消息中に躍如たるの感がある。

「宗龍禪師の事、實に知識に相違なき事は良寛禪師の御話に承り候。師そのかみ行脚の時分、宗龍禪師の道德高く聞えければ、どうぞ一度相見致し度思ひ、其の寺に一度わたらせしをりのこと、禪師今は隠居し玉ひて別所に居ましてやういに人に見え玉はず、みだりに行く事かなはねば、其侍僧に付いてとりつぎを頼み玉へど、はかしく取り次ぎくれず、いたづらに日を過し、かくては折角來りし甲斐もなく、所詮人傳にて埒あかず、直にねがひ參らむと、其趣書きしたゝめ、或夜深更に忍び出、隠寮のうらの方へまはり見るに、高塀にて踰ゆべくも見えず、こは如何せ

むと見めぐり玉ふに、庭の松が枝塀のこなたへさし出でたるあり、是れ幸ひとそれに取り付、やうく塀をこえ、庭の内に入りたれど、雨戸かたくとざして入る事ならず、是まで來りて空しくかへらむも残念なり、如何せんとしばし立ちやすらひて、此處彼處と見わたし玉ふに、雨戸の外に手水鉢ありければ、是こそよき所なれ、夜明は必ず手水し玉はん、其時御目にあたるやうにと、手水鉢の蓋の上に、文書物をのせ置き、塀のもとまで行き玉ひしが、ふと心附、もし風の吹きなばたせ、んも知れずと、又立ちもどり、石を拾ひて其上にのせ置き、辛うじてやうく立ちかへり、とかうする程に、はや朝の行事はじまり、普門品中半よむ頃、隠寮の廊下の方より、提灯てらして客殿の方へ來る僧あり、人々いふかり、何事の有りて今時分來るならんと見居たるに、良寛と申す僧有る由、只今來るべしと、御使に參りたりと云ふに、皆驚き怪みけれど、我はうれし

く、早速参り相見いたしけるに、今よりは案内に及ばず、何時にても勝手次第に参るべしと有りければ、それよりも度々参り、御話致し、との物語、其時の問答の事、問ひきかざりし事の今更残念至極にぞんじたり。されど實は有りがたき知識なればこそ其心ざしを憐み、一刻もさしおかず夜の明るるも待たで迎へをつかはされし御親切、道愛の深き事、聞くだに涙こぼれ侍りぬ。云々」

■玉島圓通寺

良寛が殆どその前半生の雲水生活の道場とした備中玉島圓通寺の如何なる寺であるかと云ふ事も、良寛の生涯を考へる上に少なからず参考となることであるから、こゝに雑誌「水鏡」誌上に掲げられた逸見遙峯氏の『玉島圓

通寺』と題した記事から重要な點を抜萃して置くことにする。

玉島は、元和寛永年間(紀二二七五—二三〇三)には、乙島と柏島との兩方の島があつたのが、古い地圖によつて知られる、其後に陸つゞきとなつて、町が出来て玉島となつてゐるのであるが、四五十年前程の繁榮は見られない、港は次第に淺くなりつゝある、それは河から吹き出す土砂の爲である、四國通ひの汽船も深く入つて來ない、其の上鐵道に離れて居るから、町として發達に影響せられてゐる、往時は此の邊を、わたつとまり 鹽泊と云つてゐたといふ、萬代集に

貢物はこぶ千舟もこぎ出よまたひの泊しほもかなひぬ(資實卿)
の歌があり尙、大嘗會和歌集に

はこひ積む鹽の泊舟出して漕けとつくさぬ貢ものかな(藤原家隆)
の歌がある、夫木鈔にも、

こへ舟にふふ人ありと聞きつるはまたひの泊るげにや有るらん(大宰大貳高遠)
などの歌がある、又古玉の浦と稱せられて、萬葉集の

ぬは玉の夜は明けぬらし玉の浦にあさりする田鶴啼きぬたるなり

も玉島地方の歌らしいと、佐々木博士の「心の花」に載せられてゐた萬葉集講義かに出てゐたと

思ふが、今手元に無いので確かめられない。
 昨年、文展に入選した、柚木久太氏の「入江」は、この玉島の港の繪である、長い／＼、入海の西側が一筋町になつて、港の奥に西から東へ一文字に町がある、海岸に面する方には倉庫が立ち並んで、昔中國地方で、肥料問屋の多かつたのを偲ばされる、それが新町であつて、そこから東へも町がのびてゐる、又南へも入海の側にのびてゐる、圓通寺は、新町の西にある町から上りつゝ、ふりかへつて見ると、ひらけた田圃一帯から、都窪橋の帯江の銅山の煙突迄も眺められる、少し北方へ眼をやると、木下幸文や小野務の生れた長尾の方も見える、本堂の少し下の邊から、松や杉の古木が高く暗く、しん／＼と生ひ茂つてゐる、庭へ上つて見ると、露坐の佛像が岩石の間に安置せられて居る、そのあたりには、巨巖がたたくさんかさなりあつて、其の間に躑躅が點綴して美しい、此の山は、元の柏崎村の東北にあるので、白華山と云ふ、北から西へは老松が生えてゐる、近く山上へ公園を造る計畫がある、南方は夢島がひらけて、此頃は除蟲菊の白い雨の様な花や、黄ろい麥が一面に見える、山上の明治十九年に建てられた、普賢閣から見渡すと、入海の東に、乙島の圓乗院が手近に見える、圓乗院は、武者小路實岳卿の系統を受けた歌人の僧澄月の小僧時代を暮した寺である、南方は静かな瀬戸内海であつて、帆船が往

き來してゐる、源平合戦のあつた、水島が製錬所を設けられて盛んに煙が上つて居る、遠くは四國路の山脈が雲間にうすらぼかされて現れてゐる、水島春潮、彌高夏雲、八咫秋月、乙州蘆花、飯山冬雪、壺江歸帆、沙美漁火、白華曉鐘の八景の名も古めかしい、此の寺は曹洞宗であつて、宇都宮の良高禪師の開基せられたもので、元祿十四年（二三六一）に建てられたのである、本尊佛は行基の作であると傳へられて居る、圓通寺と云ふ扁額は、享保九年（二三八四）に、良機住職に寶鏡寺宮徳岩尼公の筆になつたものを賜はつたものである。良寛禪の師であつた國僊禪師は、當寺第十世であるが、現住職は第廿五世にあたる、約二百年餘りで、廿五世を経てゐるとは一人の住職期間も短いものである、本堂は荒廢したため建てかへられることになつてゐる、其の豫算が壹萬五百圓であると云ふ。良寛に關して、何度も人々から近頃になつて尋ねられるが、材料が少しも無いと若僧は語つた。

■良寛とその當時の有名な歌人との接觸

『短歌私鈔』の著者齋藤茂吉氏がその「良寛雜記」の中で良寛の歌風について

次の如きことを述べてゐるのは、良寛の歌風について考へる上に少なからず参考とすべきことである。

五九六

「良寛が眞に萬葉ぶりの歌を作つたのは、五合庵定住以後にあらしい。萬葉を尊ぶに至つたのはいはゆる古學派の言説作物から暗指を得たものか、或は全然交渉なくて然うなつたのか、一言で斷ずることが出来ない。しかし縦ひ直接作物の影響がないとしても、言説から幾分の暗指を得たと考へる方が良寛の歌風を解釋するのに便利である」

良寛が千蔭の「略解」によつて萬葉集を研究したことや、又その當時相當に地位を得てゐた大村光枝と云ふ國學者と交はりのあつたことについては前に述べたが、更にその後の調べによつて良寛の生地出雲崎に前田夏蔭の門人が二三あつたことや、橘守部が永く出雲崎から國上附近に来てゐたこと

や、又良寛の弟山本由之の名が景樹門下の一人として立派にその系統人名中に擧げられてゐることなどが解つた。かう見て來るといよゝゝ良寛の歌が全然その時代の歌壇と交渉がなかつたと云ふ事が斷じがたくなるのである。

たゞ併し如何にその當時の歌壇との交渉が良寛との間にあつたにしても、良寛その人は當時の歌壇の状況や世間の歌人などには、何等頓着するところなく、極めてのんきに自分の歌を詠んでゐた事だけは、毫も疑ふ餘地がないのである。

■芭蕉翁贊

是翁以前無是翁、

是翁以後無是翁、

五九七

くも、

き、は、も、とも、

く、ぞ、や、

げに、こそ、あれ

み

は 續ケルコトバ

こ

よ トメルコトバ

(一)

むめ メト轉ズ

は

ばや 願辭

はこそ 反ス辭

なむ 願辭ニモナリ
ユカンノベタル辭ニモナル

まし ユカント同シ

まほし

まくほし ユキタク思フ意

めや 反ス辭

めやは ノベタル辭

ず

ぬ

ね

じ

で

まく ユクト云フコトチノベタルコトバ

く ユカクユクコトニナル

させ

られ

さしすせそ

(二)

にけむ、なむ、にてむ、てにき、てにし、てにしか、てにけりるれ、に
たりるれ、な||そ、や、か、の、も、は、そ、て、よ、

(三)

らん、らし、べし、めりるれ、たりるれ、な、とも、や、を、か、こを、
かは、さ、は、も、らく、

(四)

ば、りるれ、かし、や、どもれ(ヒキキチノミル)
てにをはのうごき

ず、なで、き、り、む、し、

ぞのや何たれ

ぬ、なで、し、る、む、き、

こそ

ね、なで、しを、しか、しに、れけれ

エケセテネヘメエレエ

かきくけこ^〇米
 さしすせそ
 たちつてと
 なにぬね
 はひふへほ^〇
 まみむめ
 ら^〇ろ^〇
 ノコトバニ居テ用ユ
 さしすせそ
 なにぬねの
 出處ドチラニモツカズ
 さむ 亦同じ
 喚バヒフヘ^{マヒマフバヘ}

ラロラフラヘ
 歸ラリルレ
 マヒマフマヘ
 踏マミムメ

△

さ、さ衣、さ筵、さをしか、さ蠅、さ霧
 さ、さや彦、さ行、さ歸、さ彌、さや雲
 か、か黒、か青
 ま、ま白、ま黒、ま袖、ま木、ま鳥、ま心、ま向
 み、み雪、み山、み行、み言、み歌、み林、
 を、を野、を川、を林、を松

—(以上西郡氏「良寛全傳」所載)—

つら／＼考ふるに古事記日本紀萬葉集宣命祝詞等のうへに古語とおぼゆる辭のすてに移言約言とおぼしきもの數々にあり、移約の言は本言ありて後のものなり太古の言にあらず仍ておもふに今猶上古の言ありつらむをはやくほろびてつたはらずと見えたりをしき哉。

韻

あ	か	さ	た	な
い	かい	さい	たい	ない
う	かう	さう	たう	なう
え	かえ	さえ	たえ	なえ
お	かお	さお	たお	なお

—出雲崎某氏藏—

聲

は	ま	や	ら	わ
はい	まい	yai	らい	wai
はう	まう	やう	らう	わう
はえ	まえ	やえ	らえ	わえ
はお	まお	やお	らお	わお

聲通左右韻通上下聲歸本韻留

末聲直顯韻斬顯聲剛韻柔聲和

韻故却堅下韻從聲故却橫行聲體

韻用聲有清濁韻有輕重

くさ／＼のわやおりいだすいそのもじこゑとひゞきをたてぬきにして

—佐々木信綱氏藏—

■良寛自作手毬

越後西蒲原郡國上村中島原田家に良寛自作の繡毬一箇が珍藏されてゐる。箱書は良寛と交りのあつた原田正貞の筆で「良寛禪師所愛翫自作手毬——原田正貞」とある。手毬はゼンマイの綿を中に入れてその上を白い木綿糸でかゝり、更にその上に青と茶の二色の木綿糸で極めてナイーブな模様をかゝつたものであるが、これが良寛その人が徒然に手づから苦心して拵へたものかと思ふと、たまらなく懐かしいものである。模様は植木鉢に何かの草花の咲いてゐるのを圖案化したものらしく、色の取り合せと云ひ形と云ひ、不思議にエキゾチックな味はひのあるものである。試みにその模様の大體の感じだけを、再現して見ることにする。



■衣食の料

良寛が自分の衣食の料は悉く之れを他人の施與によつて得て居た事は、彼の數多い書翰の大半がその頼み状か禮状かであるのによつても明らかに知ることが出来る。夏になれば蚊張を、冬になれば布圍を他から借りなければならなかつたほどに、彼の物質生活は簡易なものであつた。手を洗ふにも、足を洗ふにも、顔を洗ふにも、洗濯をするにも、而して味噌を摺る

にも、たゞ一つの磨鉢を以て之れに充て、ゐたと云ふほどに、彼の生活は調法に出来てゐた。それでゐて彼の人格と藝術とが、あれほどまでに高貴であつたのだ。

■「一二三」いろは

良寛の遺墨中の珍品として名高い「一二三」いろは（野良村山賀氏藏）の雙幅は、もと同村館屋某の藏してゐたものと云ふことである。その館屋は良寛が鉢の往復に屢々立寄つて休むを常としてゐた家であつたが、或日その家の主人が良寛に向つて、「良寛様、お前様は字を書くに大相上手だと云ふ話だが、わしにも一枚書いてくださらんか」と頼んだ。良寛は「よし、よし」と答へた。主人は更に「それだが、わしにむづかしい字が讀めんし、それに

良寛様の字はわけてむづかしいと云ふ話だが、どうかわしには解りよい字を書いて貰ひもしたいもんだ」と頼んだ。良寛は笑ひながら再び「よし、よし」と云つた。そして書いてくれたのが、かの「一二三」いろはの雙幅だと云ふ事である。口碑は更にその雙幅を書き終つた時に、良寛は極めて楽しさうな笑顔で「どうだ、これならわかるだら」と館屋の主人に訊ねたと云ふ事までも傳へられてゐる。

■教へ難きの嘆

良寛と親交のあつた解良榮重の手記に「師余が家に信宿日を重ね上下自ら和睦し和氣家に充ち歸去ると云とも數日の内人自ら和す師と語ること一たびすれば胸襟清さを覺ゆ師更に内外の經文を説き善を勸むるにもあらず或

は厨下につきて火を焼き或は正堂に坐禪す其話詩文にわたらず道義に不及優游として名狀すべきことなし只道義の人を化するのみ」と云ふ極めて貴い消息が傳へられてゐるが、併し他の一面に於ては良寛その人が他人を化せんとしての如何に深き悲しみを経験した人であるかを示す左の如き告白をも聞き得るのである。

としを経てをちさとよりしばく法を聴きにかふ人あり、おのれも心ざしせちなるにめでいおもひなくだきてさとせどもそのしるしもなかりけり、おもほえず涙をこぼしぬ、さてかくなも

いかにしてひとをそだてむのりのためこぼす涙はわが落すなくにさう云ふ場合の良寛は、全くそれを自分みづからの事のやうにせつなく、悲しく思つたのであらう。

■良寛の夜具の裂片

良寛の示寂地越後三島郡桐島村大字島崎木村家に良寛の着て居た夜具の裂片が大切に保存されてゐる。淺黄の辨慶縞の木綿で、至つて粗末なものである。

■良寛の葬儀の來弔者

同上木村家に「良寛上人御遷化諸事留帳——天保二年辛卯正月六日」と表記した帳面が同じく大切に保存されてゐる。それによると良寛の訃に接して來り弔するもの總て二百八十五人の多數に上つてゐる。一乞食僧の葬儀としては實に盛大なものである。

■大道太平

同上木村家の貼交屏風の中に左の如き一片がある。どう云ふ場合に良寛が人に書き示したものが解らぬが、良寛その人の内生活を考へる上に甚だ興味深い資料である。

大道太平

人憎むぢ敵
我愛ひき味方

争亂治仁無我大我

■「天上大風」

良寛遺墨中最もよく良寛その人の面目を發揮したものの、一つに數へられてゐる「天上大風」の楷書四字は今は新潟縣南蒲原郡大崎村藥崎家の藏するところとなつて居り、鈴木文臺の左の如き解が添へられてゐる。

良寛上人。道德之外。詩歌高遠。書法絶妙。人得其半紙隻字者。珍襲愛翫。因之。奸商黠估。騙人財貨。玉石混糅。以余與上人交之久。人來乞題一言者。不尠。此燕驛。東樹氏所藏。一日。東樹氏。來告余曰。上人在曰。乞食燕驛。有小童。持一紙來曰。願書此紙。上人曰。汝將何用。童曰。我欲用此。作風筆。請天上大風四字。上人便書。以與焉。僕近得之。欲軸之裝之爲一幀。願子記其所然。余展而閱之。視其眞率。無我。現於點畫之間。想昔年之笑語。慨然援筆。以識云爾。

嘉永六年癸丑晚春

文臺居士□□

■良寛和尚詩歌集補遺

□

與 鵲 齋

秋風正蕭索、衲衣亂如霞、一條枯藤杖、依舊訪君家。

□

かぜになびくおばながうへにちる(おく)つゆのたまと見しまにかつきへに
けり

□

な賀つきのねさめにきけはたかさこの尾の上にひくさほしかの聲

□

萬里戎王子、何時離月支、異花開絶域、滋蔓溢清池、漢使徒空到、神農看
不知、霜翻兼雨打、開折潛離披。

□

はなみてもいとこゝろはなくさまずぎにしこらがことをおもひて
おもふにそわへずわがみのまかりなば死出のやまぢにけたしわはむかも
あのこらをうまぬさきとはおもへどもおもふこゝろはしばしなりけり
かこてどもかひなきものをこりもせでまたもなみだのせきくるはなぞ
あさとでてこらがためにとおるはなはつゆもなみだもおきぞまされる

□

荒村淋漓一夜雨、今朝草堂繁暑收、窓中削玉遠山色、戶外引練澄江流、巖
下清泉洗病耳、樹梢寒蟬吟素秋、豫理杖錫試散步、從是風月正悠悠。

□ 翩翻飛錫御風來、霜雪皚々掩草萊、君與我舊方外友、不妨此裏與悠哉。

□ つゆ霜にそめて來ぬらむ墨ころも色にこそ出でぬうるほひにけり

□ 方外君莫羨、知足心自平、誰知青山裏、不有虎與狼。

□ 青銅好着布囊中、去渴人間小臥龍、久欲共君謀一醉、有錢時節不相逢。

□ 正月二日夜垂三更、燒香拜覽正法眼藏行事卷、于時、風雪穿壁、嚴寒破竹、
溫硯呵筆書。

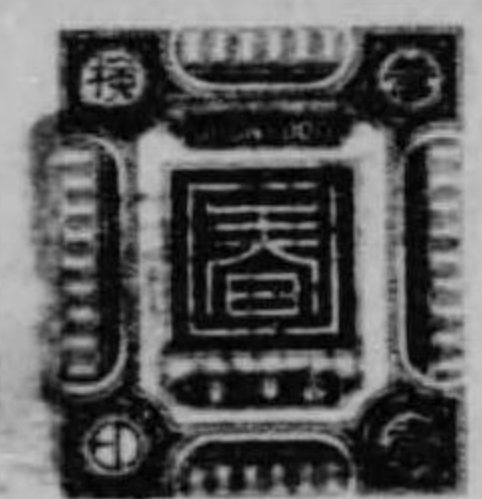
しらゆきはいくへもつもれもろこしのをむろのやまのひかしおもへば

— 終 —

大正七年六月一日印刷
大正七年六月四日發行

【大恩良寬】
【定價金貳圓】

印者權作著



著作者

相馬昌治

發行者

和田利彦

印刷者

中野鐵太郎

印刷所

東京市芝區覺宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春陽堂

電話本局五十一番
振替一六一七番

□ 類 書 作 創 □

田山花袋著 ■ 一兵卒の銃殺 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 田山花袋著 ■ 合歡の花 (短篇集) ■ 郵送料 九錢
 田山花袋著 ■ 朝 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 田山花袋著 ■ 殘雪 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 德田秋聲著 ■ 絶縁 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 德田秋聲著 ■ 媾曳 (短篇集) ■ 郵送料 六錢
 谷崎潤一郎 ■ 人魚の嘆き (短篇集) ■ 郵送料 九錢
 谷崎潤一郎 ■ 刺青外九篇 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 森林太郎著 ■ 高瀬舟 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 夏目漱石著 ■ 鶉籠 (長短篇集) ■ 郵送料 八錢
 夏目漱石著 ■ 虞美人草 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 夏目漱石著 ■ 草合 (長篇集) ■ 郵送料 八錢

□ 類 書 作 創 □

長田幹彦著 ■ 舞扇 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 長田幹彦著 ■ 雪の夜語 (短篇集) ■ 郵送料 八錢
 長田幹彦著 ■ 祇園待宵草 (短篇集) ■ 郵送料 七錢
 林和著 ■ 江戸一代女 (物語集) ■ 郵送料 七錢
 河竹繁俊著 ■ 默阿彌物語 (物語集) ■ 郵送料 八錢
 坪内逍遙著 ■ 桐葉 (長篇戲曲) ■ 郵送料 八錢
 坪内逍遙著 ■ 名残の星月夜 (長篇戲曲) ■ 郵送料 九錢
 高山樗牛著 ■ 瀧口入道 (長篇作) ■ 郵送料 五錢
 尾崎紅葉著 ■ 金色夜叉 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 長田幹彦著 ■ 續金色夜叉 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 尾崎紅葉著 ■ 多情多恨 (長篇作) ■ 郵送料 八錢
 小栗風葉著 ■ 青春 (長篇作) ■ 郵送料 八錢

□ 名家創作集 □

尾崎紅葉著 ■ 紅葉集 (全四册) (全作集) ■ 送料一册五十錢
 幸田露伴著 ■ 露伴集 (全三册) (長短篇集) ■ 送料一册三十錢
 福地櫻痴著 ■ 櫻痴集 (全三册) (長篇集) ■ 送料各册三十錢
 泉鏡花著 ■ 鏡花集 (全四册) (長短篇集) ■ 送料各册三十錢
 齋藤綠雨著 ■ 綠雨集 (長短篇集) ■ 送料一册三十錢
 村上浪六著 ■ 浪六傑作集 (全三册) (長篇集) ■ 送料各册三十錢
 小栗風葉著 ■ 風葉集 (全二册) (長短篇集) ■ 送料各册三十錢
 川上眉山著 ■ 眉山全集 (全三册) (長短篇集) ■ 送料各册三十錢
 塚原澁柿著 ■ 澁柿集 (全三册) (長篇集) ■ 送料各册三十錢
 鈴木三重吉著 ■ 三重吉全集 (全十三册) ■ 送料各册三十錢
 幸田露伴編 ■ 西鶴文粹 (裝幀美麗) ■ 送料一册四十錢
 尾崎紅葉著 ■ 鏡花雙紙 (長短篇集) ■ 送料一册三十錢

□ 創作書類 □

高濱虛子著 ■ 鶏頭 (短篇集) ■ 送料一册八十錢
 鈴木三重吉著 ■ 小鳥の巢 (長篇作) ■ 送料一册二十錢
 小山内薫著 ■ 大川端 (長篇作) ■ 送料七十六錢
 正宗白鳥著 ■ 入江のほとり (短篇集) ■ 送料九十五錢
 正宗白鳥著 ■ 死者生者 (短篇集) ■ 送料九十五錢
 長塚節著 ■ 土 (長篇作) ■ 送料九十八錢
 長塚節著 ■ 炭焼の娘 (短篇集) ■ 送料九十八錢
 里見弴著 ■ 善心悪心 (短篇集) ■ 送料九十八錢
 里見弴著 ■ 三人の弟子 (短篇集) ■ 送料九十八錢
 水上瀧太郎著 ■ 海上日記 (短篇集) ■ 送料一圓八十錢
 白石實三著 ■ 返らぬ過去 (長篇作) ■ 送料一圓二十錢
 長田幹彦著 ■ 埋木 (長篇作) ■ 送料一圓三十錢

■相馬御風氏編並解説

津 青楓氏装幀

四版出来

良寛和尚詩歌集

四六大判四百餘頁
美術的特製本
口繪十數頁
價壹圓五拾錢
送料金十二錢

之れわが文藝界思想界の重鎮たる篤者が郷里退耕後熱烈なる尊崇と深厚なる味索と忠實なる研究との餘に成れる最も信頼すべき良寛和尚の全集にして、從來世に行はれたる詩集及び歌集の誤謬を訂正したるは勿論、新たに各地の文書を涉獵して加へたる詩歌の數驚くべく多きものあり。加之巻頭へ添へられたる『良寛和尚の詩歌に就いて』と題する百頁に近き大論文は、これまで何人も企て得ざりし良寛和尚の藝術に向つての眞研究にして、良寛和尚の詩歌の精髓之れによりて始めて明示されたる觀あり。蓋し此の著を手にして始めてよく良寛の詩歌を誤らず讀むこと足らざらん。

376
143

終

